

僕はケニアで「大人」になった
京都大学工学部地球工学科国際コース 1 回
徳留将樹

僕は2011年9月4日～19日という16日間の学生ボランティアに参加した。まず、応募した主な理由は2つ。一つ目、『「スラム」を見たかった』からである。メディアを介さない、自分自身の目で、「スラム」を見たかったからである。二つ目、『技術力のない発展途上国でのインフラ整備の取り組みと、現状を見たかった』からである。結果、見れた。大満足の学生ボランティアだった、いろいろあったが。まず、何を僕が見たか述べたい。

エルドレットに着いてまず思ったのは、「道がものすごく悪い」だった。僕はもともと車酔いする人だったから、たまらなく不快だった。バンクという凸が20mごとに設置されているのである。さらに舗装道路にも関わらずポッカリ穴が開いている。中国の建設会社が大体作ったらしいがさすがである。CORE 事務所に着いたときはへとへとだった。でもこれは序の口だった。エルドレットは脇道に入るとすぐにラトソル土壌むき出しの凸凹道となるのである！これには参った。事務所に1泊した次の日はケリオビューという溪谷にいったのだが、凸凹道とくねくね道と曲がり道の連続。僕らは思わず「さんぽ」を熱唱した。後日エルドレットのキャンバー村にホームステイした。村の入り口の凸凹道を見るこ



キャンバーユナイテッドのメンバーと。

ろにはもう驚きはなくなっていた。これが普通なのだ。ホストのデイビッドはとても良い人だった。僕にスワヒリ語を教え、鳥の彫刻を作ってくれ、毎晩体を洗うお湯を沸かしてくれ、フルーツをおしえてくれ、炭の作り方を教えてくれた。最高のホームステイだった。アメーバ赤痢になるまでは。その日はホームステイ最終日だった。前の日の晩御飯からおなかの調子が悪く、夜中に2度トイレに起きた。寝不足もあった。それなのにサッカーした。

完全に調子に乗っていた。25分ハーフでフル出場。シュート1本ファウル1つ。

1-0で勝った。そして下痢での脱水と暑さの中での激しい運動により僕は熱中症になった。デイビッドにしっかり別れをつけていたかどうか定かではない。でも、やっぱりサッカーがしたかったのである。村の若者たちは本当に生氣にあふれており、最高の仲間だった。ブラザーと言ったほうが良いかもしれない。とにかく貴重な体験だった。

さて、肝心な道直しについてだが、大成功だった！なんといっても、多くの村の住民達が参加してくれたのが収穫である。子供達もよく働いてくれた。特に二日目は、天気が良

かったのと、一日目の噂を聞きつけてか、子供、ママさん、働き盛りの若者、村長、県知事、ケニア政府の人などなど素晴らしい盛況ぶりだった。Do-nou technology もうまく伝わったのではないかと思います。また同時期に、道普請人の活動が日本の外務省、さらにケニア政府からも認められたのはうれしいニュースだ。喜田さんもたいへん喜んでいた。



道直し前

→



側溝を作っているところ。



道直し終了！！・・・そして・・・

→



記念の道普請人マーク！！！！

エルドレットを発ち、ナイロビ市内のマトマイニ孤児院に移動する。この日のうちに病院へ行き、アメーバ赤痢だったとわかる。ケニアではよくある病気らしく、医師も「たいし

たことないよ」と言っていた。その言葉通り、一晩経ったら完治した。

後日、いよいよケニアー大きなスラム、キベラへ向かう。キベラはナイロビの南西部に位置する。推定人口は80万～100万といわれる。住民層は低～中所得者。掘っ立て小屋もあれば、色鮮やかなきれいなアパートもある。ビニール袋が積み重なり、真っ黒な汚水が家と家の間を流れる。豚や犬はぐったりとしている。

それと対照的に、人々には活気があった。市場でマンダージを売る人、私立小学校の塀越しに笑いかけてくる子供、How are you? としか英語をいえない子供。Chinese! と僕ら



塀越しに話掛けてくる女の子

通りにはさまざまな店が並んでいた。色鮮やかな野菜売り、パーマをかけるサロン、レゲエを大音量で流すCDショップ、ちょっと使い物にならなそうな家電売り、塩をまぶした魚売り、薪炭売り。保育所があったのには驚いた。あまり詳しく聞けなかったが、とりあえず保母さんが美人だったことは覚えている。地区が変わると町の様子も変わる。道が舗装されており、店も綺麗だ。洋服屋が目についた。この地区で昼御飯を食べた。

を呼ぶおばさん。途中で寄った骨細工工場で働く男たちは自信にあふれ、「どうだ!?綺麗だろう!?!」と喋ってくる。子供たちは、僕がカメラを持っていると気づくと、「撮って撮って!!」とポーズをきめてくれた。



大音量で音楽を流すCDショップ

その後、キベラに実際住んでいる人の家に入ることができた。一部屋は6畳くらい。二部屋に妻と娘2人の4人暮らし。詳しくは分からないが、家賃をある男に払っているらしい。不法占拠の所で家賃集金があることに驚いた。

その後、路地裏と言える、住み慣れた人しか行けないような道を歩いた。ここで初めて、下水処理がされている、いわゆるマンホールを発見。でもあんまり意味はなく、どぶ川の横をかに歩きで歩く。しまいにはどぶ川を優雅に流れるうん〇に足を突っ込む者も出る始末。かなりディープな部分を見ることができた。

キベラを歩いていて思った。「スラムってなんだろう？」排除すべきもの？違う。このままでいいの？違う。改善する方法は？分からない。考えが浮かばない。こんな広大で、人々の生活基盤となったものを、「無」にすることなど不可能だ。だとしたら、ちまちま今の環境を改修していくしかない。果たしてどれほどの時間と金と労力がかかるだろう？

とても学生団体や NGO 団体ひとつの力では無理だ。

国家レベルの影響力和金が必要となる。そもそも、スラムってあつては悪いものなのかな？農村からナイロビに職を求めて家族と引っ越してきた低所得者層の人々にとって、スラムは家賃が安く、かつナイロビにも近い、最適とも言える所なのではないか？

まだ考えはまとまってない。でも、自分の目で、「スラム」を見ることができたのは大きな財産となった。この経験はいずれ必ず生きてくる。20歳というおおきな節目を、アフリカの地、ケニアで迎えることができたことを感謝する。ありがとう。

以上



キベラの汚水川



‘Peace wanted alive’ 落書き